

**H30 年度熊本市健康づくりに関する
アンケート調査結果（成果指標の状況等）抜粋
【食育】**

第2次食の安全安心・食育推進計画成果指標
(食育の推進分野)

到達度凡例	
平成24年要比	矢印
目標値超	↑
上	↗
維持	→
下	↘

*H29実績値

No.	項目	H24 基準値	H27 中間値	H30 実績	H30 目標値	到達度 (H24比)	
①	食育に関心がある市民の割合	73.4%	69.1%	77.1%	90%	↗	
②	「朝食又は夕食を家族と一緒に食べる共食の回数の増加」 ※1週間のうち朝食又は夕食を家族と一緒に食べる回数	10回	10回	9回	さらに増加	↘	
③	1週間あたりの朝食について ※幼児は「毎日食べる割合」 ※他は「ほとんど食べない」と答えた割合	幼児	95.3%	96.2%	97.3%	100%	↗
		小学5年生	0.9%	0.9%	1.7%	0%	↘
		中学2年生	2.0%	2.6%	4.2%	0%	↘
		20歳代男性	29.4%	22.6%	20.0%	15%	↗
		30歳代男性	29.4%	16.2%	26.5%	15%	↗
		65歳以上	3.7%	1.8%	3.4%	0%	↗
④	体験型食育活動の取り組み(実施園数/全施設数) 【保育園】	公立	100%	100%	*100%	100%	↑
		私立	90.4%	94.8%	*87.2%		↘
⑤	体験型食育活動の取り組み(実施園数/全施設数) 【幼稚園】	公立	100%	100%	*100%	100%	↑
		私立	100%	100%	*100%		↑
⑥	授業参観・懇談会等で保護者へ食育の啓発を行った学校の割合	97.0%	98.5%	*94.0%	100%	↘	
⑦	企業、大学等での食育に関する講座の開催(件数)	19件	40件	*20件	30件	↗	
⑧	栄養に関する表示等を参考にしている市民の割合	69.0%	67.9%	63.4%	80%	↘	
⑨	内臓脂肪症候群の予防や改善のために適切な食事、定期的な運動、定期的な体重測定を継続的に実践している市民の割合	27.7%	32.1%	34.2%	50%	↗	
⑩	食育の推進に関するボランティア数	1,208人	1,410人	*1,536人	1,600人	↗	
⑪	食生活面で「くまもとらしさ」を感じたことのある市民の割合	52.9%	57.1%	58.3%	65%	↗	
⑫	「熊本市子どもの食育推進ネットワーク」における連携活動した団体等の割合	37.6%	62.7%	*62.6%	60%	↑	
⑬	農林漁業体験を経験した市民の割合の増加	37.7%	27.5%	32.5%	50%	↘	
⑭	進んで地元農産物を購入する市民の割合	69.4%	68.3%	73.8%	80%	↗	
⑮	学校給食における地元農産物を使用する品目数	39品目	40品目	*33品目	45品目	↘	
⑯	家庭での食事に郷土料理等を取り入れている市民の割合	49.2%	45.5%	69.9%	70%	↗	
⑰	ごみを少なくするため「買すぎ」「作りすぎ」をしないよう心がけをしている市民の割合	69.9%	66.9%	74.6%	75%	↗	
⑱	熊本市の良質な水がおいしさの基になっていると思う市民の割合	80.8%	81.8%	80.7%	85%	↘	

参考：⑥授業参観・懇談会等で保護者へ食育の啓発を行った学校の割合
《旧成果指標および目標》H24(48.5%) H27(46.7%) 目標値H30(60%)

第2次計画 成果指標の検証

○成果指標 18 項目のうち、「食育への関心」、「幼稚園での体験型食育活動」、「企業、大学等での食育講座の開催」、「内臓脂肪症候群予防のための実践」、「食育推進ボランティアの人数」「食生活でのくまもとらしさ」、「子どもの食育推進ネットワークでの連携数」、「地産地消」、「家庭での郷土料理等」、「食品ごみの削減への心がけ」の 10 項目に成果が見られました。特に、「幼稚園での体験型食育活動」、「子どもの食育推進ネットワークでの連携数」については成果指標を達成し、「家庭での郷土料理を取入れ」については、顕著な効果が得られました。

○これは、取組施策に掲げる「市民自らが育む食」、「くまもとの自然環境と食文化に根ざした食育の推進」の促進に向けた関係団体とのネットワークの構築、また、効果的な連携により成果が上がってきているものと推測されます。また、郷土料理や行事食の家庭での取入の増加については、「郷土料理」や「行事食」が特別なものではなく、季節を感じながら頂く身近なものとして再確認する市民が増えたためと推測されます。これからも、引き続き啓発を行っていきます。

○一方で、成果指標から見える課題として、「朝食の欠食」、「栄養成分表示を参考にする」割合等が挙げられます。また、「内臓脂肪症候群の予防善のための実践」は、改善が見られたものの、特に若い世代で更に落ち込んでおり、市民の健全な食生活の実践やそれを支える食環境整備などについて取組を充実していく必要があると考えます。

1 「市民自らが育む食」への理解と健全な食生活の実践

1) 家庭における食育の推進

2) 学校・保育所・幼稚園等における食育の推進

3) 職場・大学等における食育の推進

食育に関心がある市民の割合

20 歳以上で、食育に『関心がある』人は 77.1%。平成 24 年調査と比較して 3.7 ポイント上回る。全国と比較して大きな差はみられない。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○食育に関心がある市民の割合	73.4%	69.1%	77.1%	90%

※20 歳以上の回答者で、「関心がある」+「どちらかと言えば関心がある」を選択した割合

「朝食又は夕食を家族と一緒に食べる」共食の回数の増加

「朝食又は夕食を家族と一緒に食べる」共食の回数は 1 週間で 9 回となり、平成 24 年調査と比較して 1 回減少。

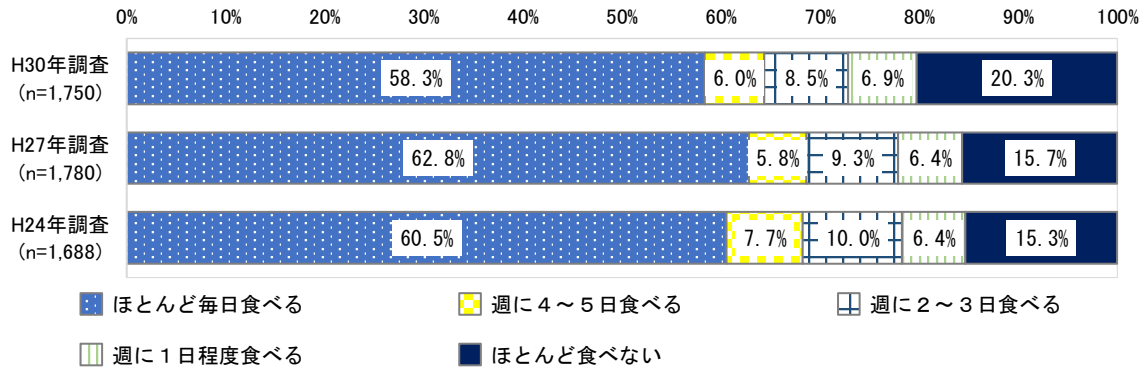
項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○「朝食又は夕食を家族と一緒に食べる」共食の回数の増加 ※1週間のうち朝食又は夕食を家族と一緒に食べる回数	10回	10回	9回	さらに増加

※20 歳以上の回答者で、朝食・夕食それぞれで「ほとんど毎日食べる」を 7 回、「週に 4~5 日食べる」を 5 回、「週に 2~3 日食べる」を 3 回、「週に 1 日程度食べる」を 1 回、「ほとんど食べない」を 0 回とし、各選択肢の回答者数と乗じたものの合計を回答者数の総数で割り朝食・夕食の平均回数を算出。朝食・夕食の平均回数を足しあわせた数値を共食の回数としている。

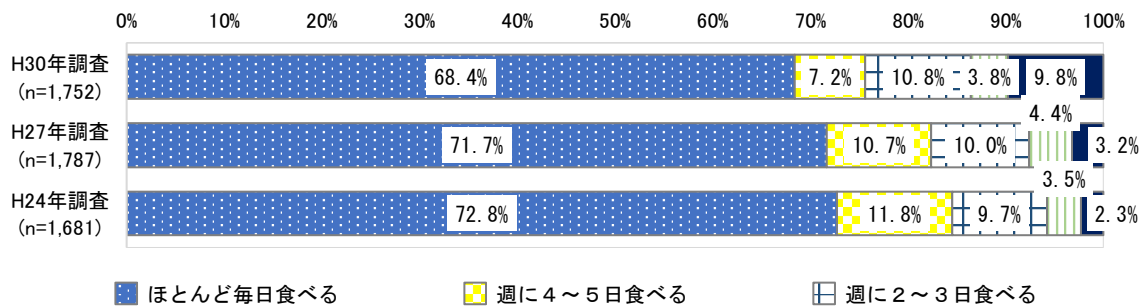
《朝食を家族と一緒に食べる頻度 〈0歳を除く〉》

朝食や夕食を「家族と毎日食べる」割合は平成24年比でそれぞれ低下した。また、朝食や夕食を「家族とほとんど一緒に食べない」と答えた割合は、平成24年比で上昇した。

また、「朝食を家族と一緒に食べる頻度」が高いほど、食事が『楽しい（「とても楽しい」＋「楽しい」）』人の割合は高い傾向にあった。



《夕食を家族と一緒に食べる頻度 〈0歳を除く〉》



年代毎のデータを経年で見ると、「高齢者の孤食」が進んでいる。

○高齢者（65歳以上）が「朝食を家族と一緒に食べる」共食の頻度

（「ほとんど毎日食べる」は、H24 78.8% ⇒ H30 62.5%）

（「ほとんど食べない」は、H24 10.2% ⇒ H30 25.8%）

○高齢者（65歳以上）が「夕食を家族と一緒に食べる」共食の頻度

（「ほとんど毎日食べる」は、H24 86.1% ⇒ H30 69.8%）

（「ほとんど食べない」は、H24 3.5% ⇒ H30 17.8%）

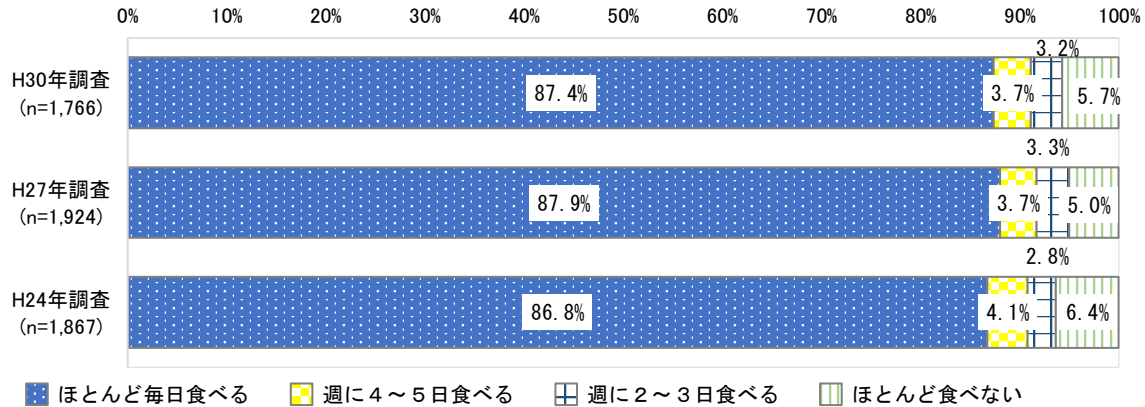
1週間当たりの朝食の欠食率

平成24年調査と比較して、幼児期、20歳代男性、30歳代男性及び高齢者は目標に近づいたものの、その他の世代については欠食率が増加した。

項目		(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○1週間あたりの朝食の欠食率 ※幼児期は毎日食べている割合	幼児期(1歳~5歳)	95.3%	96.2%	97.3%	100.0%
	小学5年生	0.9%	0.9%	1.7%	0%
	中学2年生	2.0%	2.6%	4.2%	0%
	20歳代男性	29.4%	22.6%	20.0%	15.0%
	30歳代男性	29.4%	16.2%	26.5%	15.0%
	65歳以上	3.7%	1.8%	3.4%	0.0%

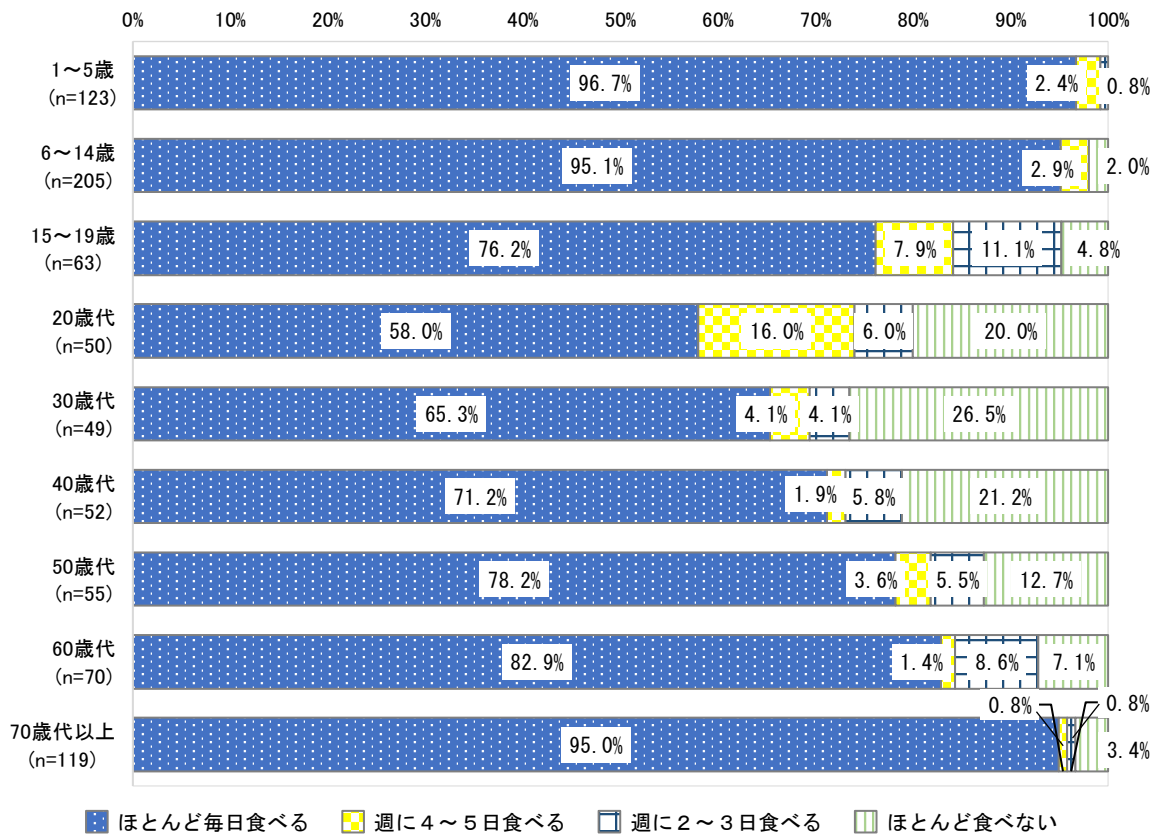
《1週間当たりの朝食を食べる頻度 〈0歳を除く〉》

1週間当たりの朝食を食べる頻度について、「ほとんど毎日食べる」は87.4%と約9割にせまる。

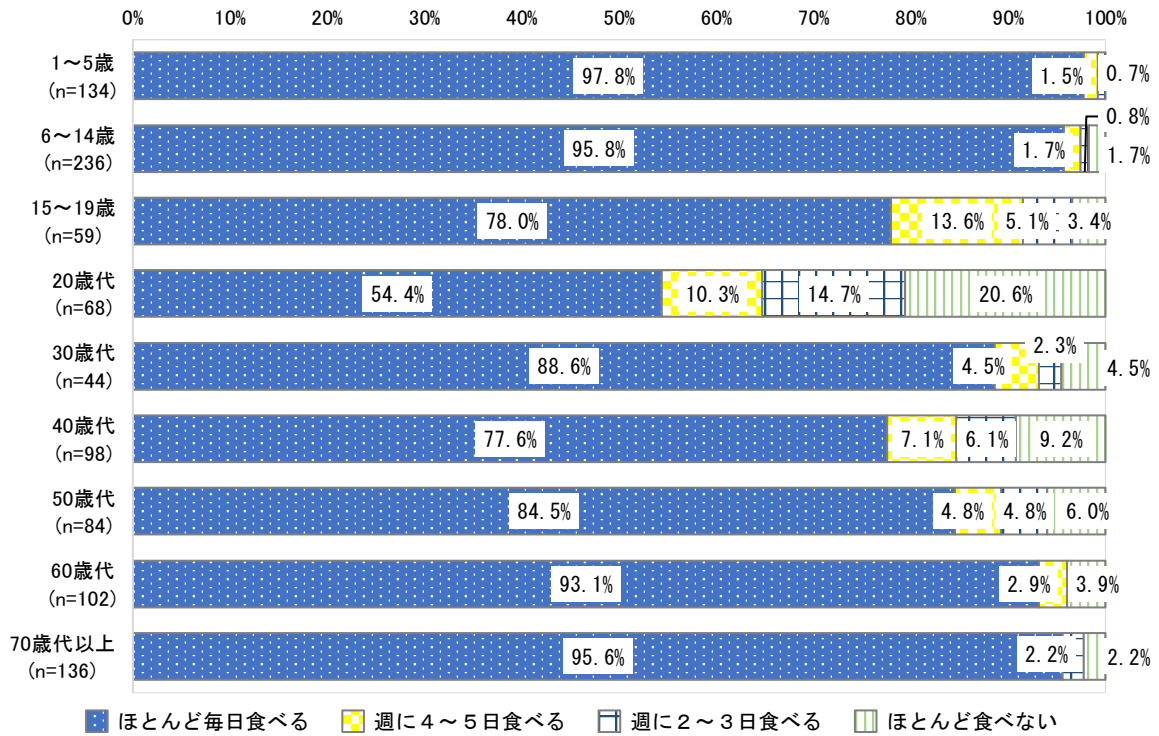


年齢区分別でみると、「ほとんど食べない」とする朝食の欠食率は、男性では20歳代から増加し始め20.0%、30歳代が26.5%で最も高い。女性では、20歳代が20.6%で最も高く、際立っている。平成24年調査と比較して、男女ともに年代別で見ると同じような傾向にある。

H30年調査 男性



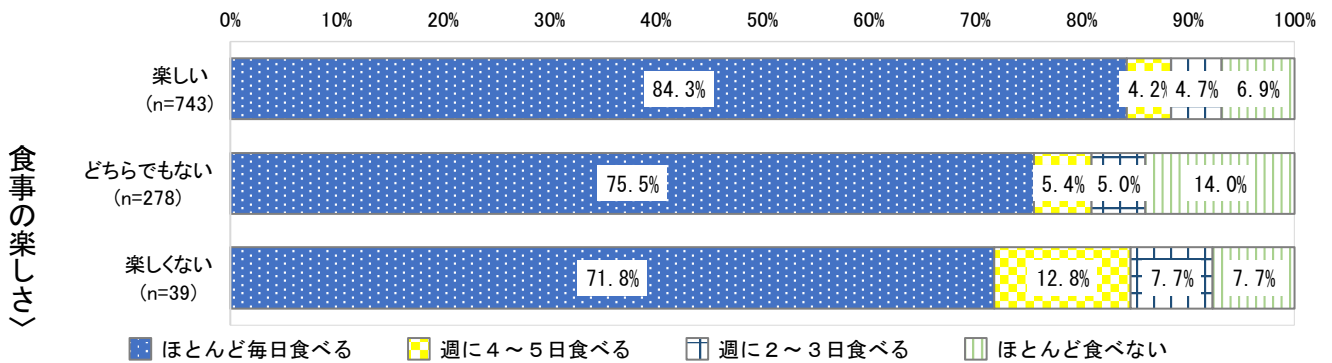
H30年調査 女性



《「食事の楽しさ」と1週間当たりの朝食を食べる頻度》

「食事の楽しさ」との関係を見ると、朝食を「ほとんど毎日食べる」人は、食事を「楽しい」と感じている人の割合が高い傾向にある。また、平成24年調査と比較しても、同様の傾向がみられる。

〈1週間あたりの朝食を食べる頻度〉

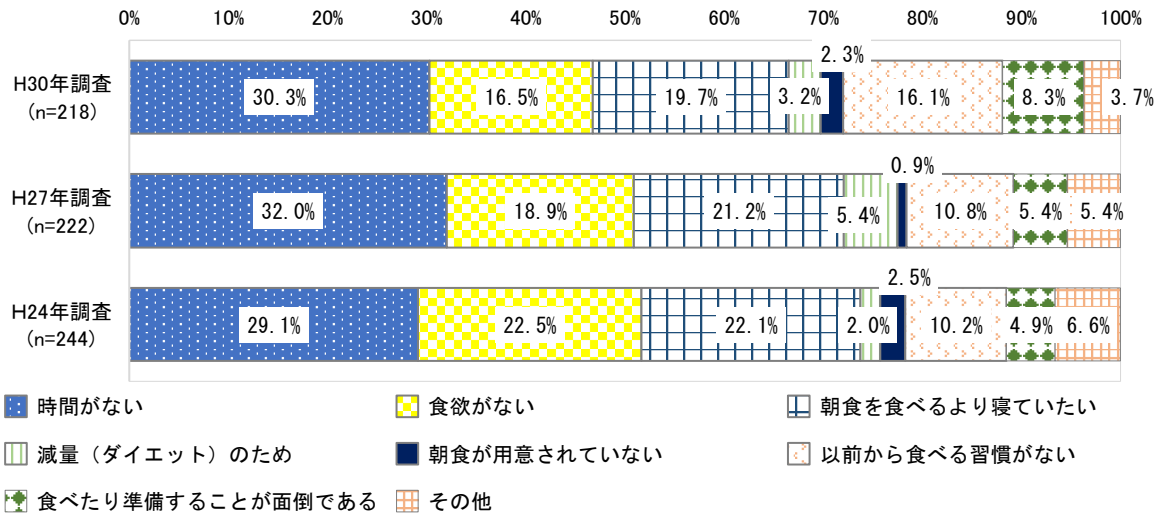


※ 15歳以上の回答者

《朝食を食べない理由 〈0歳を除く〉》

朝食を食べない最も大きい理由は、「時間がない」が30.3%で最も高く、次いで「朝食を食べるより寝ていたい」が19.7%、「食欲がない」が16.5%の順。

平成24年調査と比較して、特徴的なものとしては、「以前から食べる習慣がない」が、男女ともに約1.6倍に増えている。(H24 10.2% ⇒ H30 16.1%)



体験型食育活動の取り組み（保育所）

保育所での体験型食育活動の取り組みについては、平成 24 年調査と比較して、公立では 100% を維持し、私立は 3.2 ポイント減の 87.2% となった。

項目		(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○体験型食育活動の取り組み (実施園数/全施設数)【保育園】	公立	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	私立	90.4%	94.8%	87.2%	100.0%

体験型食育活動の取り組み（幼稚園）

幼稚園での体験型食育活動の取り組みについては、公立、私立ともに 100% を維持している。

項目		(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○体験型食育活動の取り組み (実施園数/全施設数)【幼稚園】	公立	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	私立	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

授業参観・懇親会等で保護者へ食育の啓発を行った学校の割合

授業参観・懇親会等で保護者への食育の啓発を行った学校の割合は、平成 24 年調査と比較して、3.0 ポイント減の 94.0% となった。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○授業参観・懇談会等で保護者へ食育の啓発を行った学校の割合	97.0%	98.5%	94.0%	100%

企業・大学等での食育に関する講座の開催（件数）

企業、大学等での食育に関する講座の開催件数は、平成 24 年調査と比較して、1 件増の 20 件となった。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○企業、大学等での食育に関する講座の開催(件数)	19件	40件	20件	30件

2 健全な食生活を実践するための環境整備

- 1) 日本型食生活の実践へ向けた情報の発信
- 2) 食生活改善をサポートする人材育成
- 3) 食品関連事業者と連携した食育の推進

栄養に関する表示等を参考にしている市民の割合

栄養に関する表示等を参考にしている市民の割合は 63.4%で、平成 24 年調査と比較して 5.6 ポイント低下し、目標を 16.6 ポイント下回る。

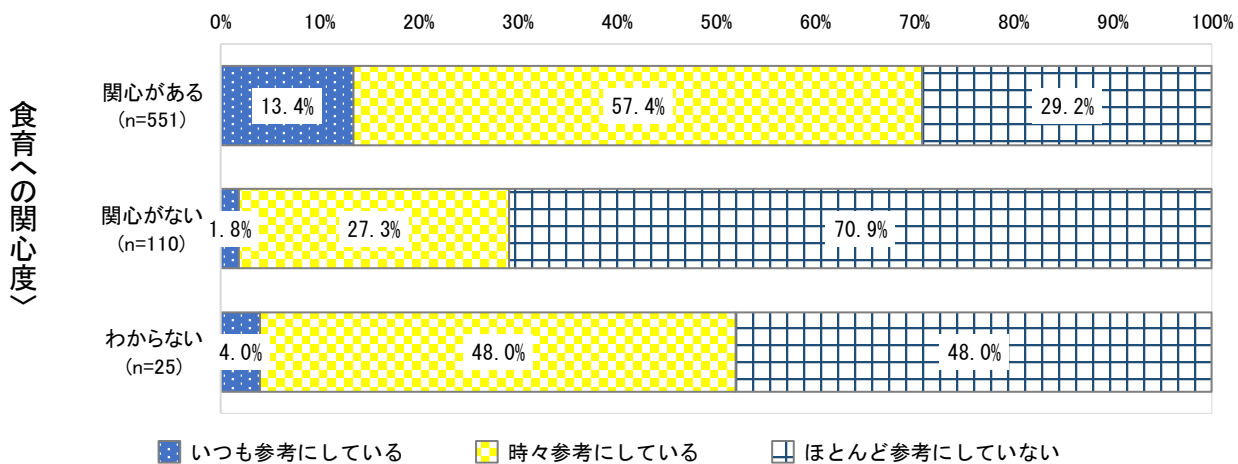
項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
〇栄養に関する表示等を参考にしている市民の割合	69.0%	67.9%	63.4%	80%

※15 歳以上の回答者で、「いつも参考にしている」+「時々参考にしている」を選択した人の割合

《「食育への関心度」と「栄養成分表示の参考度合い」》

食育への関心度が高い人は、栄養成分表示の参考度合いが高い傾向にある。

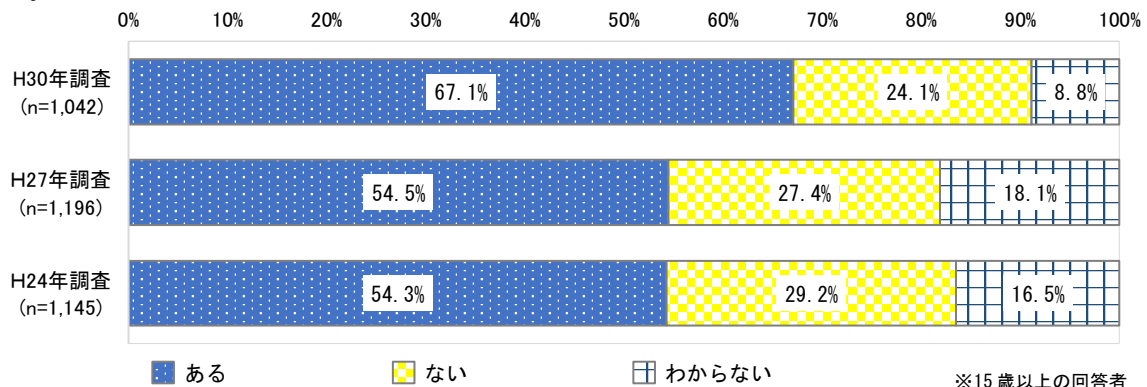
〈栄養成分表示の参考度合い〉



《飲食店等での栄養成分の表示の認知度》

飲食店等での栄養成分の表示の認知度について、見たことがある人の割合は、平成 24 年比で約 12.8 ポイントも増加した。

性別でみると、「見たことがある」は、男性が 58.4%、女性が 73.6%で、女性が 15.2 ポイント上回った。



※15 歳以上の回答者

主食、主菜、副菜を組み合わせた食事を1日2回以上ほぼ毎日食べている市民の割合

主食、主菜、副菜を組み合わせた食事を1日2回以上ほぼ毎日食べている市民の割合は76.1%。

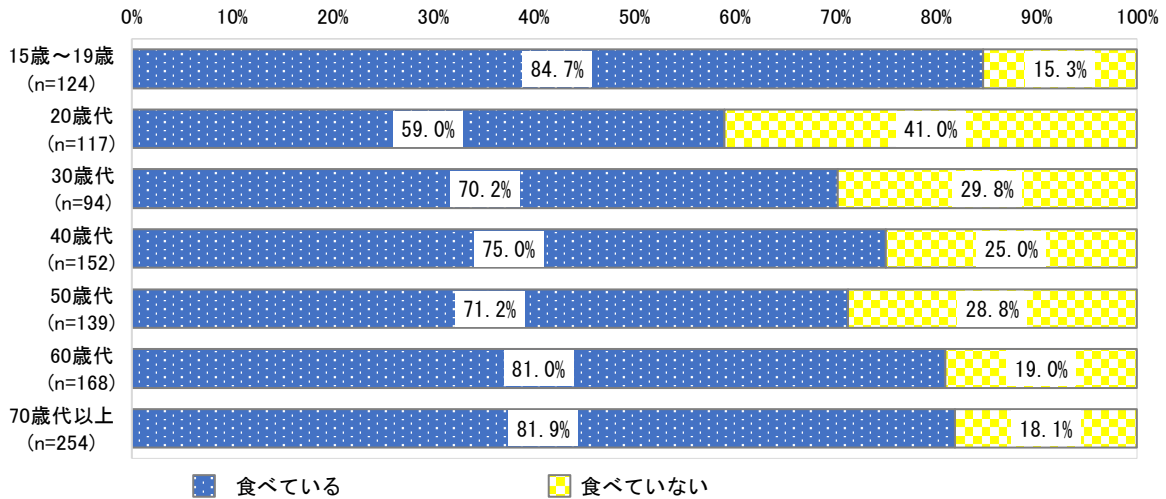
項目	(H30年・実績)
主食、主菜、副菜を組み合わせた食事を1日2回以上ほぼ毎日食べている市民の割合	76.1%

※15歳以上の回答者で、「食べている」を選択した人の割合

《年齢区別に主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を食べる割合》

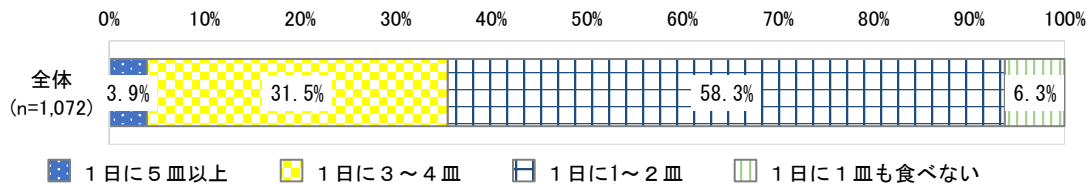
20歳代を除く年代で7割を超えている。なお、20歳代は59.0%に留まっている。

20歳代と30歳代を合わせると64.0%となっている。



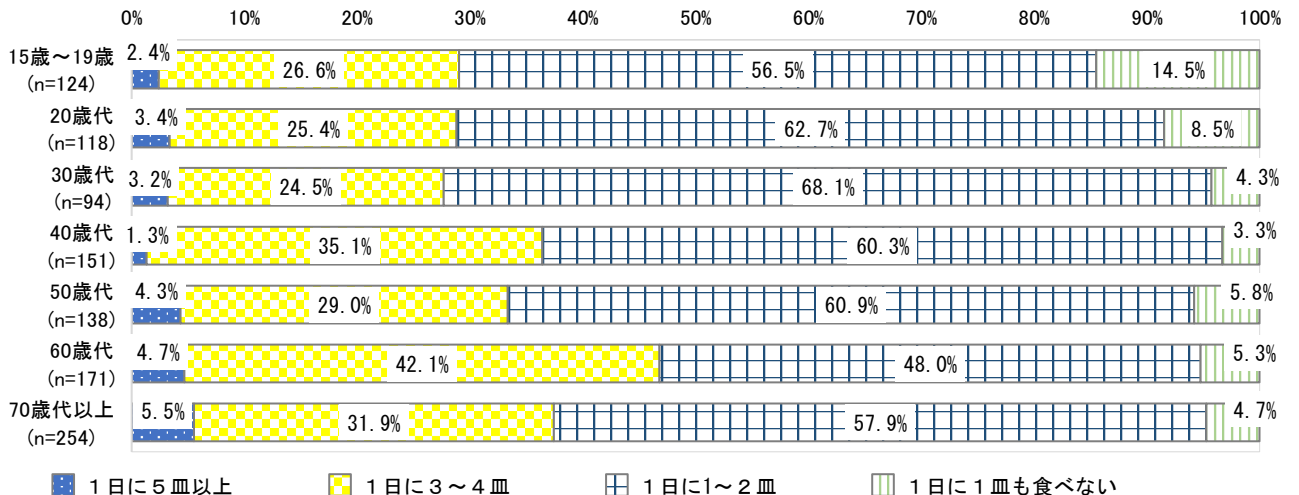
《野菜を1日に食べる量》

野菜を一日5皿以上摂取している割合は、3.9%と少なく、「1日に1～2皿」が58.3%と半数以上を占める。次いで「1日に3～4皿」が31.5%の順。



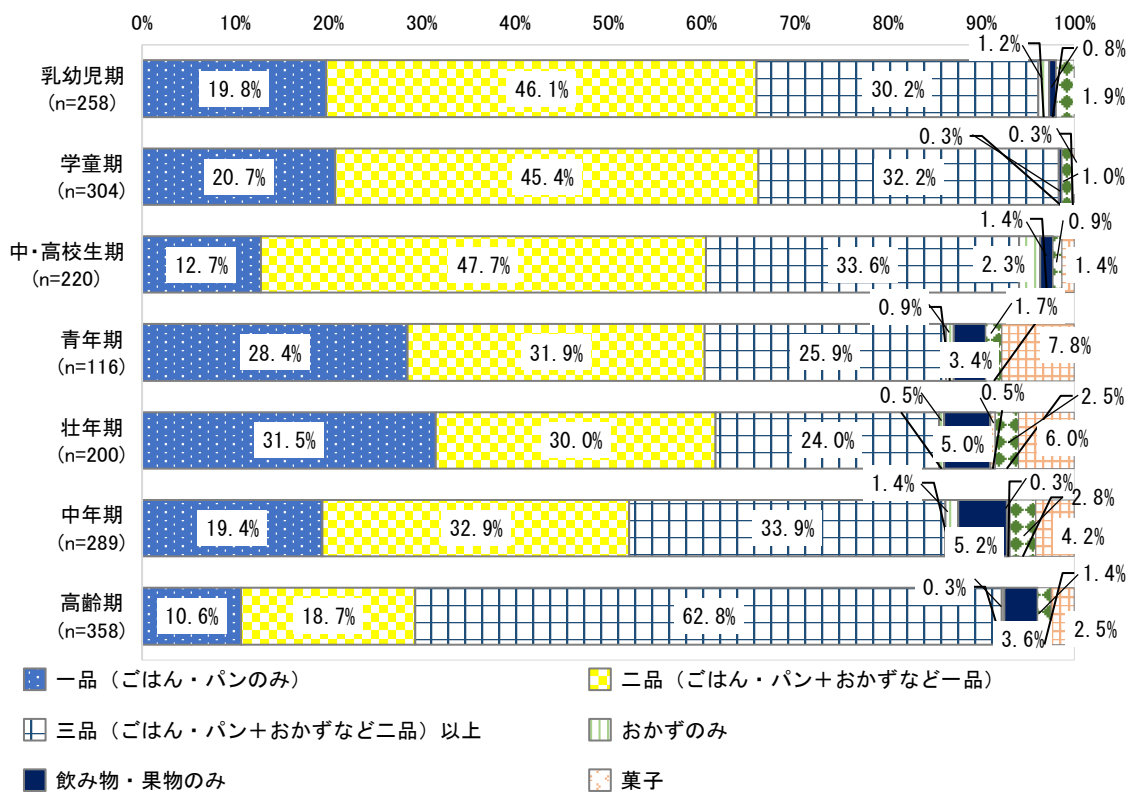
《野菜を1日に食べる量 年齢区分別》

「1日に1～2皿」はすべての年代において約5～6割を占めるが、15～19歳では「1日に1皿も食べない」が14.5%と他の世代に比べ高い。全体的にみると、30歳代までの若い世代では、一日に2皿以下の割合が7割を超えており、野菜摂取不足が伺える。



《普段、どのような朝食を食べることが多いか》

ライフステージ別でみると、高齢期を除くライフステージにおいて、「二品」が占める割合が3割から約5割と大きい。中でも高齢期においては、「三品以上」が6割を占める。



内臓脂肪症候群の予防や改善のために適切な食事、定期的な運動、定期的な体重測定を継続して実践している市民の割合

内臓脂肪症候群の予防や改善のために適切な食事、定期的な運動、定期的な体重測定を継続的に実践している市民の割合は34.2%。平成24年調査と比較して6.5ポイント上回るが、目標を15.8ポイント下回る。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○内臓脂肪症候群の予防や改善のために適切な食事、定期的な体重測定を継続的に実践している市民の割合	27.7%	32.1%	34.2%	50%

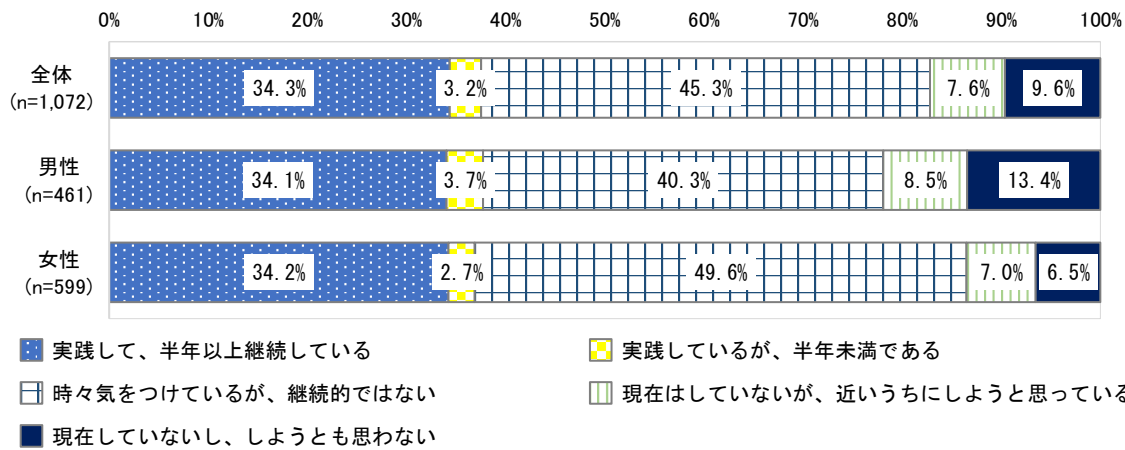
※15歳以上の回答者で、「実践して、半年以上継続している」を選択した人の割合

生活習慣病の予防や改善のために、ふだんから適正体重の維持や減塩等に気をつけた食生活を継続的に実践している市民の割合

生活習慣病の予防改善のための適切な食事等の実践について、「時々気をつけているが、継続的ではない」の割合が45.3%と最も高く、次いで「実践して、半年以上継続している」が34.3%。

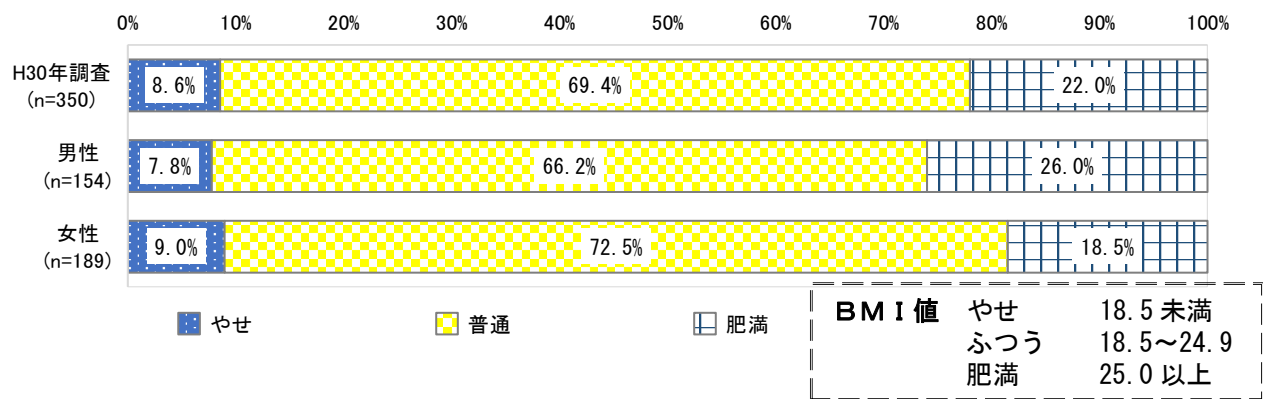
項目	(H30年・実績)
生活習慣病の予防や改善のために、ふだんから適正体重の維持や減塩等に気をつけた食生活を継続的に実践している市民の割合	34.3%

※15歳以上の回答者で、「実践して、半年以上継続している」を選択した人の割合



BMI 判定 <65歳以上>

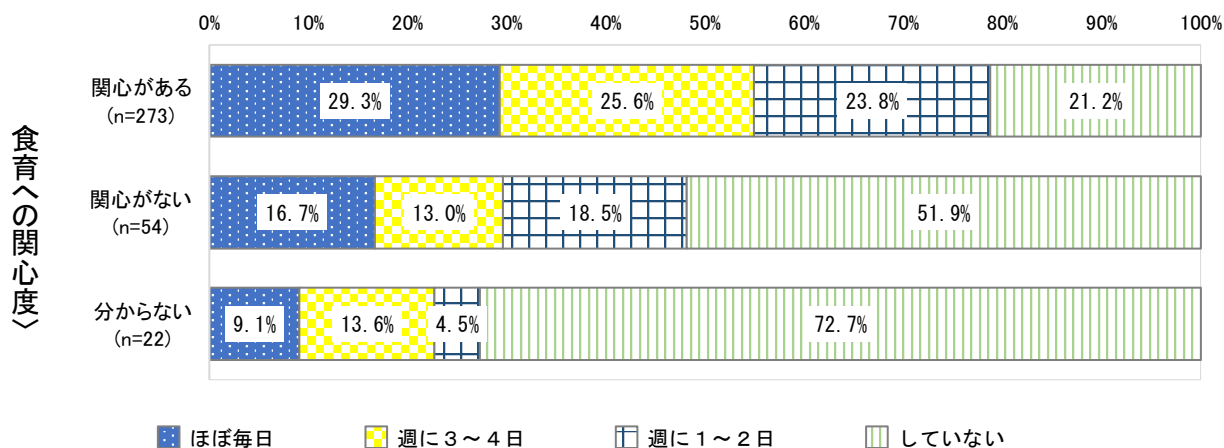
65歳以上のBMI判定は、「普通」が69.4%、「肥満」が22.0%、「やせ」が8.6%。
性別で見ると、「肥満」は、男性が26.0%、女性が18.5%で、男性が7.5ポイント上回る。



65歳以上の高齢者で運動習慣がある（「ほぼ毎日」＋「週に3～4日」＋「週に1～2日」）のは、70.0%であった。

また、運動習慣がある人では、78.6%の人が朝食をほぼ毎日食べており、1日5皿以上野菜を食べている人が77.7%、また、食事バランスガイドの利用法の認知度も79.5%と高く、栄養成分表示についても約8割の人は参考にしていて。さらに、食育の関心度も78.7%と高いことがわかった。

<運動習慣>



食育の推進に関するボランティア数

食育の推進に関するボランティア数は1,536人で、平成24年から328人増加し、目標との差は64人となった。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○食育の推進に関するボランティア数	1,208人	1,410人	1,536人	1,600人

3 市民運動としての食育の推進

- 1) 市民協働による食育運動の展開
- 2) 食育支援団体のネットワークの整備

食育に関心がある市民の割合（再掲）

食生活面で「くまもとらしさ」を感じたことのある市民の割合

食生活面で「くまもとらしさ」を感じたことのある市民の割合は58.3%で、平成24年調査と比較して5.4ポイント上回り、目標を6.7ポイント下回る。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○食生活面で「くまもとらしさ」を感じたことのある市民の割合	52.9%	57.1%	58.3%	65%

※15歳以上の回答者

《「くまもとらしさ」を感じるのはどんなことか》

「くまもとらしさ」を感じる場所は、「水がおいしいこと」が89.1%で最も高く、次いで、「果物や野菜、米など農産物がおいしいこと」が78.4%、「のりや魚介類など水産物がおいしいこと」が50.5%、「しょうゆが甘いこと」が45.1%の順。

「熊本市子どもの食育推進ネットワーク」における連携活動した団体等の割合

「熊本市子どもの食育推進ネットワーク」における連携活動した団体等の割合は、62.6%と目標を達成した。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○「熊本市子どもの食育推進ネットワーク」における連携活動した団体等の割合 ※保育園・幼稚園が他団体と連携して食育に取り組んだ割合	37.6%	62.7%	62.6%	60%

4 くまもとの自然環境と食文化に根差した食育の推進

- 1) 生産者と消費者の交流促進
- 2) 地産地消の促進
- 3) くまもとの食文化の伝承
- 4) 食育を通じた環境保全

農林漁業体験を経験した市民の割合（0歳を除く）

農林漁業体験を経験した市民の割合『参加したことがある（「週に1回程度」＋「月に1～2回程度」＋「年に数回程度」）』は32.5%で、平成24年調査と比較して5.2ポイント、目標を17.5ポイント下回る。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○農林漁業体験を経験した市民の割合	37.7%	27.5%	32.5%	50%

農林漁業体験（みかん狩り・芋ほり・潮干狩り・魚釣り・植樹体験・山菜採取など）を、今まで体験し

たことがある市民の割合（0歳を除く）

「農林漁業体験（みかん狩り・芋ほり・潮干狩り・魚釣り・植樹体験・山菜採取など）を、今まで体験したことがありますか」の問いに対し、体験したことがあるは 83.0%、体験したことがないは 17.0%であった。

項目	(H30年・実績)
農林漁業体験を、今まで体験したことがある市民の割合	83.0%

進んで地元農産物を購入する市民の割合

進んで地元農産物を購入する市民の割合は 73.8%で、平成 24 年調査と比較して 4.4 ポイント上回り、目標を 6.2 ポイント下回る。

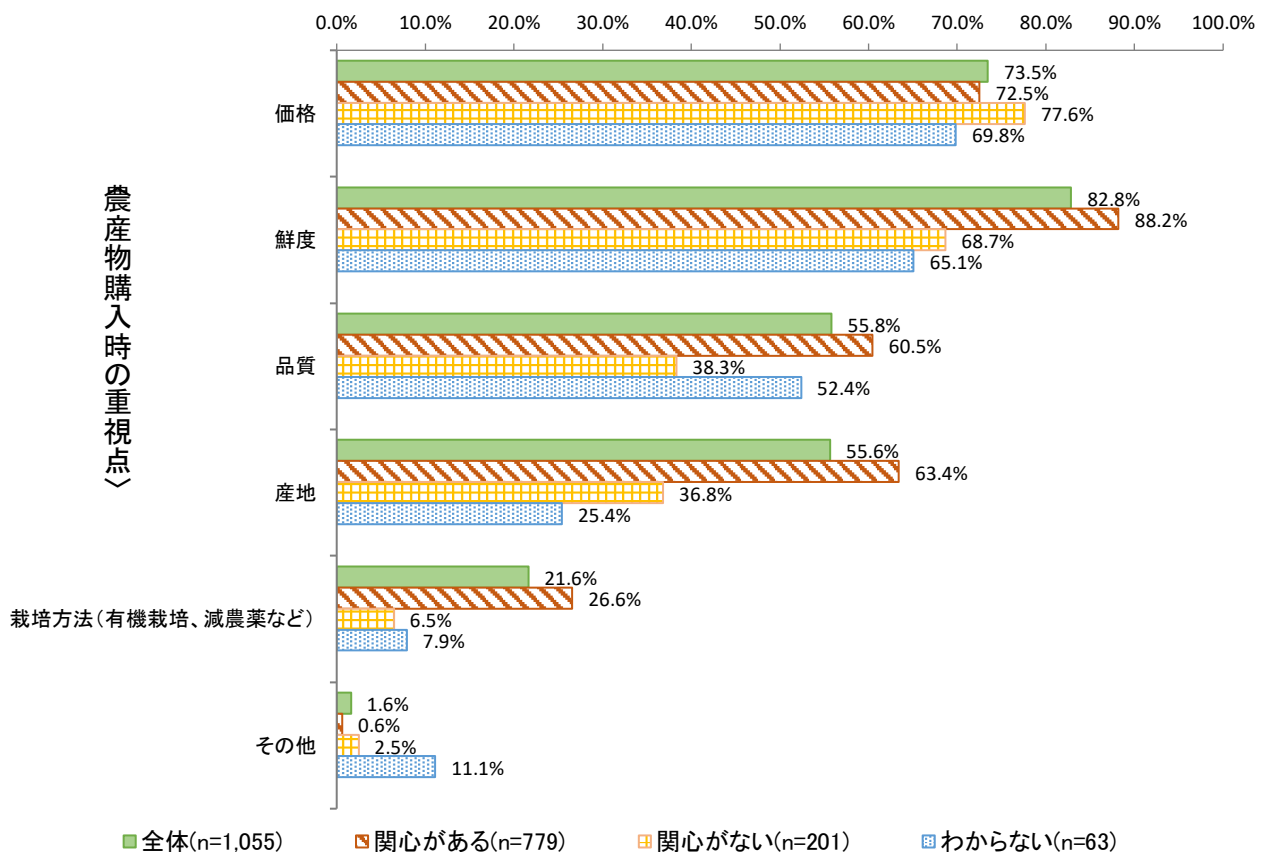
項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
〇進んで地元農産物を購入する市民の割合	69.4%	68.3%	73.8%	80%

※15歳以上の回答者で、「いつもしている」＋「時々している」を選択した人の割合

《農産物購入時の重視点》

農産物購入時の重視点と「食育への関心度」との関係を見ると、食育に関心が高い人ほど、地元農産物を購入しており、「価格」以外の「鮮度」、「産地」、「栽培方法（有機栽培、減農薬など）」など、他の要素もを重視していた。

〈食育への関心度〉



学校給食における地元農産物を使用する品目数

学校給食における地元農産物を使用する品目数は 33 品目。平成 24 年調査と比べて 6 品目少なくなった。

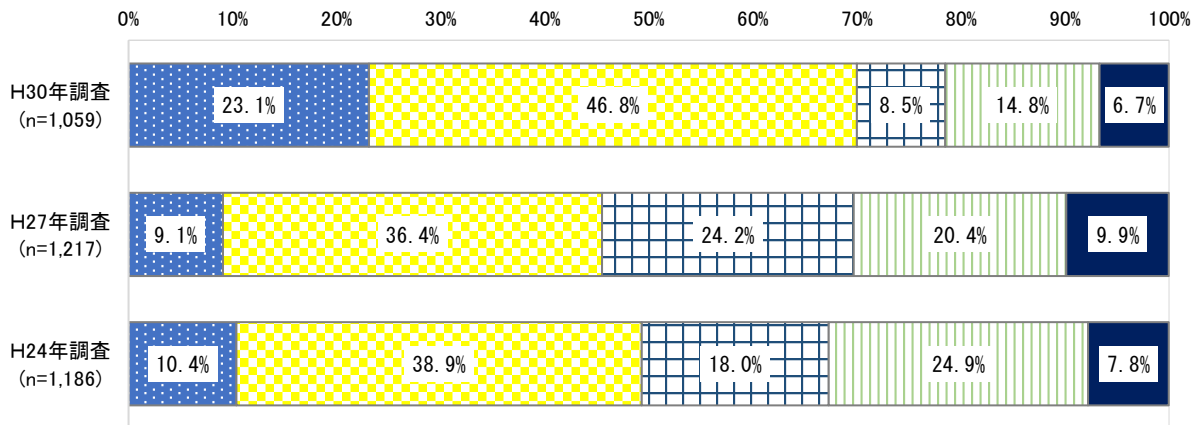
項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○学校給食における地元産物を使用する品目数	39品目	40品目	33品目	45品目

家庭での食事に郷土料理等を取り入れている市民の割合

家庭での食事に郷土料理等を取り入れている市民の割合は 69.9%で、平成 24 年調査と比較して 20.7 ポイントと大幅に上回り、目標をほぼ達成した。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○家庭での食事に郷土料理等を取り入れている市民の割合	49.2%	45.5%	69.9%	70%

※15歳以上の回答者で、「よくとりいれている」＋「時々とりいれている」を選択した人の割合



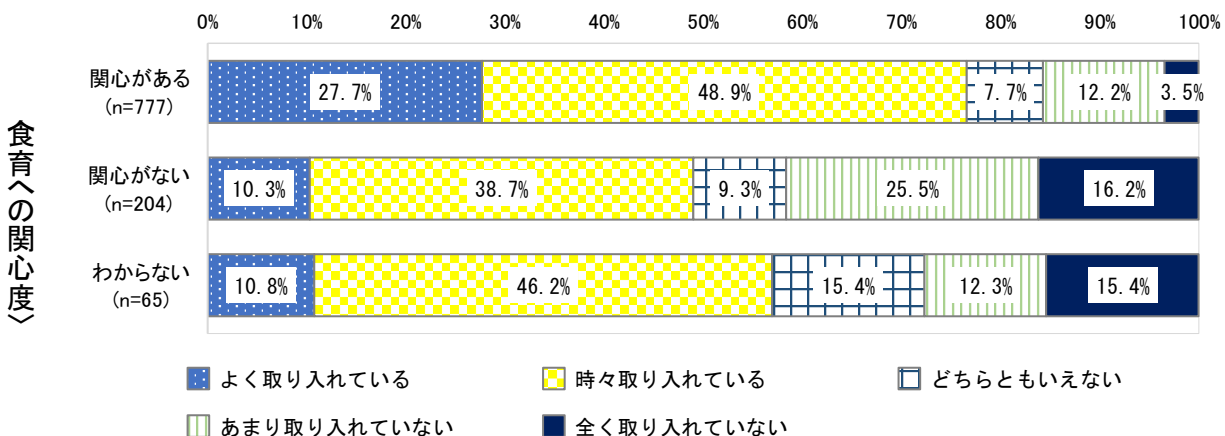
よく取り入れている
 時々取り入れている
 どちらともいえない

 あまり取り入れていない
 全く取り入れていない

《「家庭の食事での伝統料理や郷土料理の取り入れ状況」と「食育への関心度」》

食育への関心が高い人は、郷土料理を取り入れている（「よく取り入れている」＋「時々取り入れている」）割合が高い。平成 24 年調査と比較すると、同じような傾向がみられる。

〈家庭の食事での郷土料理等の取り入れ状況〉



よく取り入れている
 時々取り入れている
 どちらともいえない

 あまり取り入れていない
 全く取り入れていない

ごみを少なくするため『買いすぎ』『作りすぎ』をしないよう心がけをしている市民の割合

ごみを少なくするため「買いすぎ」「作りすぎ」をしないよう心がけをしている市民の割合は 74.6% で、平成 24 年調査を 4.7 ポイント上回る。目標とは 0.4 ポイントの差がある。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○ごみを少なくするため「買いすぎ」「作りすぎ」をしないよう心がけをしている市民の割合	69.9%	66.9%	74.6%	75%

※15 歳以上の回答者で、「いつも心がけている」 + 「時々心がけている」を選択した人の割合

ライフステージ別でみると、『心がけている（「いつも心がけている」 + 「時々心がけている」）』割合は、すべてにおいて約 6 割を超えるが、高年齢層ほど高く、高齢期が 80.0%、中年期が 78.4%。

平成 24 年調査と比較して、高校生期、青年期、壮年期では、「いつも心がけている」の割合が大幅に増加した。

高校生期：H24 年	15.4%	⇒	H30	35.4%
青年期：H24 年	18.8%	⇒	H30	30.8%
壮年期：H24 年	26.0%	⇒	H30	30.2%

熊本市の良質な水がおいしさの基になっていると思う市民の割合

熊本市の良質な水がおいしさの基になっていると思う市民の割合は 80.7% となり、平成 24 年調査を 0.1 ポイント下回る。目標とは 4.3 ポイント差となった。

項目	(H24年・基準)	(H27年・実績)	(H30年・実績)	(H30年・目標)
○熊本市の良質な水がおいしさの基になっていると思う市民の割合	80.8%	81.8%	80.7%	85%

※15 歳以上の回答者